

【原文①】

其三道行書、悉取訣於集議、以爲天信。即且響應立効也。

其正神靈者、取訣於洞明萬萬人也、以爲天信。

其凡文欲正之者、取訣於拘校、以爲天信。

其欲樂知吾書信者、取訣於瞽疾行之、且與天響應、善者日興、惡者日消、以爲天信。

其欲署置得善人者、取訣於九人。其問入室與未者、取訣於洞白也形無彰蔽、以爲天信。

其欲知身成道而不死者、取訣於身已成神即度世矣、以爲天信。

其欲洽洞知吾書文意者、從上到下盡讀之、且自照察、心大解、無復疑也、一得其意、不能復去也。

【校勘①】 『太平經』卷之一百八「要訣十九條」第一百七十三

1 「其三道行書、悉取訣於集議、以爲天信」、『太平經』作「其三道行書者、悉取訣於集議、以爲天信、即其之人上建也」

2 「其正神靈者、取訣於洞明萬萬人也、以爲天信」、『太平經』作「其正神靈者、取訣於洞明萬萬人也、以爲天信矣」

3 「其欲樂知吾書信者」『太平經』作「其欲樂知吾道書信者」

4 「其問入室與未者、取訣於洞白也」、『太平經』作「其問入室成與未者、取訣於洞明¹白也」

5 「其欲知身成道而不死者、取訣於身已成神」、『太平經』作「其欲知身成道而不死者、取訣於身已成神也」

【書き下し文①】

其の三道行書、悉く訣を集議に取り、以て天信と爲す。即ち且つ響きのごとく應じ立ちどころに効くなり。

其の神靈を正す者は、訣を萬萬の人を洞明することに取り、以て天信と爲す。

其の凡文 之を正さんと欲する者、訣を拘校に取り、以て天信と爲す。

其の吾が書の信を知ること¹を樂（ねが）い欲する者、訣を取ること、瞽疾（すみやか）に之を行い、且つ天と響應し、善なる者は日び興り、惡なる者は日び消えることに於いてし、以て天信と爲す。

其の署置して善人を得んと欲する者、訣を九人に取る。

其の入室なるか未だせざるかを問う者、訣を取ること、洞白なるや、形に彰蔽無きに於いてし、以て天信と爲す。

其の身、成道して不死なるかを知らんと欲する者、訣を取ること、身已に神を成し、即ち度世するに於いてし、以て天信と爲す。

其の洽く吾が書の文意を洞知せん欲する者、上従り下に到るまで、盡く之を讀み、且つ自ら照察すれば、心は大いに解し、復た疑い無きなり。一たび其の意を得れば、復た去ること能

わざるなり。

【訳①】

この三道行書（天地人に行われる道書）は、すべて（神人たちが）集い議論して秘訣を定めたもので、天信（天意の證し）となす。三道行書を用いれば、響きのように反應があり、たちどころに効果がある。

神靈を正しくするものは、万人を洞察する知恵より秘訣を定め、それを天信となす。

あらゆる文章を正そうとするものは、校勘によって秘訣を定め、それを天信となす。

吾の道書の靈驗を知りたいものは、すばやくこれを行えば、天と影響しあい、善なるものは日々興り、惡なるものは日々消えていくことによって秘訣を定める。それを天信となす。

役所と官職を置いて善人を得ようとするものは、九人（の議論）によって秘訣を定める。

（得道の境地に）入室できているか、できていないかを問いただすものは、（全身が）洞白となり、肉體に彰（あらわれ）も蔽（かくれ）もなくなることによって秘訣を定める。それを天信となす。

道を成して不死の身となったのかを知りたいものは、身がすでに神と成り、ただちに世俗を超越することによって秘訣を定め、それを天信となす。

あまねく私の書の文意を洞知したいと思うものは、上より下にいたるまですべてこれを讀み、そのうえに自ずから觀照し洞察すれば、心は大いに悟り、復た疑うことなく、一たびその奥義を體得すれば、また失うことはない。

【注釈①】

○其三道行書

『太平經』卷之四十八・「三合相通訣」第六十五「書者、但通文書三道行書也」。

『太平經』卷五十五「欲樂第一者宜象天、欲樂第二者宜象地、欲樂第三者宜象人、欲樂第四者宜象萬物。象天者獨老壽、得天心。象地者小不壽、得地意。象人者壽減少、象萬物者死、無時無數也。象天者、三通文、天有三文、明爲三明、謂日月列星也。日以察陽、月以察陰、星以察中央、故當三道行書、而務取其聰明。……象地者、二道行書。象人者、一道行書。」

○取訣

『太平經』では、「要訣十九條」に集中して出ている

○以爲天信

『太平經』では、「要訣十九條」にのみ出る表現のようである

○即且響應立効也

『太平經』卷三十九「解師策書訣」第五十「信用之者、立効見響應、是其明證也、迺與天合、故響應也」。

○洞明

『太平經』卷七十三至八十五戊部五至十七 闕題「古者帝王得賢明乃道興、不敢以下愚不肖爲近輔、速以吾此文付上德之君行之。洞明者光、以三氣相見問之、…」。

○其凡文欲正之者、取訣於拘校

『太平經』卷九十八己部之十三「核文壽長訣」第一百五十八「故令使真人付道於上德之君、拘校凡文人辭聖書者、明以示衆賢、使一俱覺解迷與惑也。已拘校凡文之後、災日去矣」。

○洞白

『太平經』卷七十三至八十五戊部五至十七 闕題「凡精思之道、成於幽室、不求榮位、志日調密、開蒙洞白、類似晝日」。

○其欲知身成道而不死者、取訣於身已成神、即度世矣

『太平經』卷一百五十四至一百七十癸部不分卷「賢不肖自知法」「夫人愚學而成賢、賢學不止成聖、聖學不止成道、道學不止成仙、仙學不止成真、真學不止成神、皆積學不止所致也」。

○成道

『太平經』卷之九十八「包天裏（り）地守氣不絕訣」第一百六十「賢明欲樂活者、可學吾文、思其意、入室成道、可得活」。

○度世

『楚辭』遠游「欲度世以忘歸兮、意姿睢以擔擣。（洪興祖補注、度世、謂僊去也。）」

○洞知

『太平經』卷六十九「天師深洞知天地表裏陰陽之情」。卷九十六「已洞知之。」

○照察

『太平經』卷之一百一十九「三者爲一家陽火數五訣」第二百一十二「天與日與心常明、無不而照察」。

【原文②】

其欲效吾書、視真與偽、以治日向太平、以爲天信。
其欲壽可得與不者、取訣於太平之後也、如未太平、先人流災爲害、難以效命、以爲天信。
大陽欲知太平者、取訣於由斷金也。

水與火、欲厭絕奸臣、詆不得作者、取訣於由斷金、衰市酒也。

欲得天道大興法者、取訣於拘校眾文與凡人訣辭也。

欲得良藥者、取訣拘校凡方文而效之也。

欲得疾太平者、取訣於悉出真文而絕去邪偽文也。

欲樂思人不復殺傷女者、取訣於各居其處、隨力衣食、勿使還愁苦父母而叛逆也。

欲除疾病而大開道者、取訣於丹書吞字。

欲知集行書訣也、如其文而重丁寧、善約束之、行之一日、消百害〔獨〕〔猾〕人心、一旦轉而都正也、以爲天信。

【校勘②】

6 「其欲效吾書、視真與偽」、『太平經』作「其欲效吾書、視其真與偽者」

7 「其欲壽可得與不者、取訣於太平之後也」、『太平經』「其欲知壽可得與不者、取訣於太平之後也」。

8 「如未太平、∴以爲天信」、『太平經』作「如未太平、∴以爲天信矣」

9 「大陽欲知太平者、取訣於由斷金也」『太平經』作「太陽欲知太平者、取訣於由斷金也」

10. 「取訣於丹書吞字」、『太平經』作「取訣於丹書吞字也」

【書き下し文②】

其の吾が書を效（な）らわんと欲するもの、真と偽を視、以て治して日び太平に向い、以て天信と爲す。

其の壽 得可きやいなやを（知らんと）欲する者は、訣を取ること、太平の後になるも、未だ太平ならざるが如くし、先人の流災を害と爲し、以て效命するに難しとするに於いてす。⁴ 以って天信となす。

太陽もて太平を知らんと欲する者、訣を斷金に由るに取る。

水と火もて、奸臣を厭絶し、詆の作るを得ざらしめんと欲する者は、訣を取ること、斷金に由り、市酒を衰すことに於いてす。

天道を得て大に法を興さんと欲する者、訣を取ること、眾文と凡人の訣辭を拘校するに於いてす。

良き藥を得んと欲する者、訣を取ること、凡の方文を拘校して之を效かせんことに於いてす。

疾かに太平を得んと欲する者、訣を取ること、悉く真文を出し、而して邪偽の文を絶つ去るに於いてするなり。

人の復た女を殺傷せざらんと樂い思わんと欲する者は、訣を取ること、各おの其の處を居り、力に隨い衣食し、還えつて父母を愁苦せしめて反逆すること勿らしむことに於いてするなり。

疾病を除いて大いに開道せんと欲する者、訣を丹書吞字に取る。

集いて書訣を行うを知らんと欲するや、其の文の如くして丁寧を重ね、善く之を約束し、之を行うこと一日なれば、百害の人心を猾（みだ）すを消し、一旦に轉じて都て正しくなる。以て天信と爲す。

【訳②】

わたしの書をならおうとするものは、真と偽を見分けて治め、太平に向う。それを天信（天意の証し）となす。

長寿が得られるか、得られないかを（知りたい）ものは、太平の後になっても、まだ太平になっていないようにみなし、先人の遺した災いを弊害とみなし、教令を發効させ難いとみなす（慎重さに）秘訣を定め、それを天信となす。

（三氣の中）太陽によって太平を理解しようとするものは、武器を斷ちきり（戦争をなくす）ことによって秘訣を定める。それを天信となす。

水と火によって奸臣を嫌い絶ちきり、よこしまな事が起こらないようにしようとするものは、秘訣を定めること、武器を斷ちきり、お酒の販賣を衰えさせる。

天道を體得して大に法度を復興させようとするものは、あらゆる文章に書かれている秘訣と人々の言説を取り調べ正すことによって秘訣を定める。

（世の中を治す）良い薬を得ようとするものは、あらゆる處方文を取り調べ校正し、それを効かせることに秘訣を定める。

すみやかに太平を得ようとするもの、すべての真文を世の中に出し、邪偽の文を絶ち去ることに秘訣を定める。

人々がふたたび女性を傷ついたり殺したりさせないと思ひ願うものは、れぞれその居場所に居り、それぞれの力に合わせて衣食を備え、還えって父母を愁えさせたり、氣を逆らうことがないようにすることに、秘訣を定める。

疾病をなくし、大に道を開こうとするものは、丹書して符字を服用することに秘訣を定める。⁵

人々が集まって書訣を行うことを知りたいと思うなら、その書かれた文の通り、丁寧を重ね、善くこれを約束する。これを一日行うことで、百害の人心をみだすものは消え去り、一旦の轉經で都てが正しくなる。それを天信となす。

【注釈②】

○先人流災為害

『太平經』卷九十六己部之十一「守一入室知神戒」第一百五十二「是文乃天所以券正凡人之心、以除下古承負先人之餘流災、以解天病、以除上德之君承負之謫也。子知之邪」。

○太陽欲知太平者

『太平經』卷十八至三十四乙部不分卷「名爲神訣書」「太陰・太陽・中和三氣共爲理、更相感動、人爲樞機、故當深知之」。

○斷金

『易』繫辭上傳「子曰、君子之道、或出或處、或默或語。二人同心、其利斷金、同心之言、其臭如蘭」。

○取訣於拘校眾文、與凡人訣辭也。欲得良藥者、取訣拘校凡方文、而效之也。欲得疾太平者、取訣於悉出真文、而絕去邪偽文也。

『太平經』卷四十一丙部之七「件古文名書訣」第五十五「是故天使吾深告敕真人、付文道德之君、以示諸賢明、都并拘校、合天下之文人口訣辭、以上下相足、去其復重、置其要言要文訣事、記之以爲經書、如是迺后天地真文正字善辭、悉得出也。邪偽畢去、天地大病悉除、流災都滅亡、人民萬物迺各得居其所矣、無復殃苦也。」

○欲除疾病而大開道者

『太平經』卷四十九丙部之十五「急學真法」第六十六「有上古大真道法、故常教其學道・學德・學壽・學善・學謹・學古・學平・學長生。所以盡陳善者、天之爲法、乃常開道門。」

○取訣於丹書吞字

『太平經』卷九十二己部之七「洞極上平氣無蟲重複字訣」第一百三十六「自是之後、天樂人爲正直、以他文爲之、天神亦助下之、隨人意往來。上士見人吞字、歸思亦然、當一吞字皆能教。故曰天道一旦而行。」

【原文③】

「請問、瑞者何等之名也」。

「子何故爲愚耶。」

「願天師不棄、示以一言。」

「夫瑞者、清也、靜也、正也、專也、心與天地同、不犯時令也。」

「願聞。以何知其清靜・端正・專一耶」。

「善哉、子之問也。夫天地之性、自古到今、善者致善、惡者致惡、正者致正、邪者致邪、此自然之術、無可怪也。故人心、端正清靜、至誠感天、無有惡意、瑞應善物、一故能致瑞應也。諸邪用心佞偽、皆無善應。此天地之大明徵也。子知之耶。善惡皆有應也、不調和者致不和、此天之明效也。」

「善哉。」

【校勘③】 『太平經』卷之一百八「瑞議訓訣」第一百七十四

11. 「請問瑞者、何等之名也」、「『太平經』作「請問瑞者、何等之名字也」

12. 「子何故爲愚耶」、「『太平經』作「子何故因爲愚邪」

13. 「願天師不棄、示以一言」、「『太平經』作「不敢故愚也、實不及。願天師不棄、示以一言。」

14. 「夫瑞者、清也、靜也、正也、專也」、「『太平經』作「瑞者、清也、靜也、端也、正也、專也、一也」

15. 「瑞應善物一、故能致瑞應也」、「『太平經』作「瑞應善物爲其出。子欲重知其大信、古者大聖賢皆用心清靜專一、故能致瑞應也」

16. 「善惡皆有應也」、『太平經』作「然邪者致邪、亦是其應也」

17. 「不調和者致不和、此天之明効也」、『太平經』作「不調者致不調、和者致和、此天之應明効也」

【書き下し文③】

（真人）「請いて問う、「瑞なる者は何等の名なるや」。

（天師）「子は何故に愚為や」。

（真人）「願わくは天師棄てずと、示すこと一言を以てせよ。」

（天師）「夫れ瑞なる者、清なり、靜なり、正なる、專なるや、心と天地とは同じく、時令を犯さざるなり。」

「願わくは聞かん、何を以ってか、其の清靜・端正・專一を知るや。」

「善なるかな、子の問いなるや。夫の天地の性、古自り今に到るまで、善なる者は善を致し、惡なる者は惡を致し、正なる者は正を致し、邪なる者は邪を致す。此れ自然の術、怪しむ可くこと無きなり。故に人心は端正清靜なりて、至誠もって感天し、惡意有る無く、瑞應は善物なり。一となるが故に能く瑞應を致すなり。諸の邪は心を用うること佞偽し、皆な善應無し。此れ天地の大明徴なり。子は之を知るか。善惡皆應ずる有るなり、不調和なる者は不和を致たし、此れ天の明効なり。」

「善きかな」。

【訳③】

（真人）「伺わせていただきます、瑞なるものはどういった名称でしょうか。」

（天師）「あなたは、なんと愚かなのか。」

（真人）「天師はみすてないで、一言を示してください。」

（天師）「瑞は、清く、淨く、正しく、專らであり、心と天地は同じく、時令にむくいることはありません。」

（真人）「何をもつて清靜、端正、專一を知りますか。聞きたいと願います。」

（天師）「良いことです、あなたがした質問は。すべての天地が持っている本性は、古より現在にいたるまで、善たるは善をいたし、惡たるは惡をいたし、正しきは正をいたし、邪たる者は邪をいたします。これは自然の術なり、怪しむことは一つもありません。それで人心は端正・清靜であつて、至誠あれば感天し、惡意は無く、瑞應は善物であり、（心が）專一になるがゆえに、瑞應をいたすことができます。色々の邪惡は心の持ちかたが佞偽なるので、すべて善い應いが無りません。これは天地が付与する大なるしるしです。あなたは知っていますか。善惡はすべて應ずることがあります。不調和なるものは不和をいたし、これは天が付与する明効であります。」

（真人）「すばらしく、よいことです。」

【注釈③】

○請問瑞者何等之名也…「なんら」

『後漢書』孫程列傳「尚書郭鎮時臥病、聞之、即率直宿羽林出南止車門、逢景從吏士、拔白刃、呼曰、「無干兵」。鎮即下車、時節詔之。景曰、「何等詔。」

『太平經』卷十八至三十四乙部不分卷「守一明法」「守一時之法、行道優劣。夫道何等也。萬物之元首、不可得名者。六極之中、無道不能變化。」

○不犯時令

『太平經』卷一百十八庚部之十六「天神考過拘校三合訣」第二百一十一「今天上良善平氣至、常恐人民有故犯時令而傷之者」。

○願聞以何知其清靜端正專一耶

『太平經』卷一百二十至一百三十六辛部不分卷「凡人能執善、清靜自居、外不妄求端正、內自與腹中王者相見、謂明能還睹其心也」。

○天地之性

『孝經』聖治「曾子曰、敢問聖人之德、無以加於孝乎。子曰、天地之性、人為貴。人之行、莫大於孝。孝莫大於嚴父。嚴父莫大於配天、則周公其人也」。

『太平經』卷十八至三十四乙部不分卷「名為神訣書」「元氣自然、共為天地之性也。」

○至誠感天

『禮記』中庸「唯天下至誠、為能經綸天下之大經、立天下之大本、知天地之化育」。

『漢書』鄒陽傳「臣聞忠無不報、信不見疑、臣常以為然、徒虛語耳。昔荊軻慕燕丹之義、白虹貫日、太子畏之。（應劭曰、燕太子丹質於秦、始皇遇之無禮、丹亡去、厚養荊軻、令西刺秦王。其精誠感天、白虹為之貫日也。）」

『太平經』卷一百五十四至一百七十癸部不分卷「神人真人聖人賢人自占可行是與非法」

「夫瑞應反從胸中來、隨念往來、須臾之間、周流天下。心中所欲、感動皇天、陰陽為移、言語至誠感天、正此也」。